

103 進行卵巣癌治療における Carbo-platin の単剤投与及び ADM、CPA 併用の randomized trial の成績

国立福山病院

平林光司, 岡田悦子, 中妻嘉夫, 赤松可得

〔目的〕 Carboplatin の特徴、ADM、CPA との併用療法、Cisplatin との randomized trial の成績及び pilot study から Carbo-A-p 療法の望ましい Regime を求める事。

〔方法〕 Phase II study における Carbo 投与 13 例 30 クールの成績を Cis 投与 29 例のそれと比較した。ADM (35 mg/m^2), CPA (500 mg/m^2) を同一量として、Carbo と Cis との併用 randomized trial で比較した (11 例)。次に ADM、CPA を 20% 減量し、Carbo を 2 群 (350 mg/m^2 , 250 mg/m^2) に分けて併用した 18 クールの成績から望ましい Regime を求めた。

〔成績〕 1. Carbo 単剤投与の抗腫瘍効果は 53.8%、Cis の 58.6% とほぼ同様であったが CR 例がなく、やや劣る印象を得た。2. Carbo の利点は Hydratin を行わなくても腎障害が発生しない事、嘔吐が軽度である事、副作用としては骨髄障害が Cis より強い事。特に、DLF は血小板と考えられる。3. randomized trial では、Carbo-CAP の有効率は 60%、Cis-CAP のそれは 50% と差を認めなかったが、単剤投与の成績と同様に Carbo で CR 例がなく、やや劣る印象を得た。4. Pilot study では Carbo $350 \text{ mg} \pm 25 \text{ mg/m}^2$ 群では障害が強すぎ、Carbo $250 \text{ mg} \pm 25 \text{ mg/m}^2$ 群では軽すぎる成績が得られた。

〔結論〕 1. Carboplatin は抗腫瘍効果において Cisplatin にやや劣るが、成績で示した利点があり、第一次治療後の、特に外来での間歇投与に最も適した薬剤と考えられる。2. Carbo-CAP の望ましい Regime は、Carboplatin $300 \text{ mg} \pm 25 \text{ mg/m}^2$, ADM 28 mg/m^2 CPA 80 mg/m^2 と考えられた。

104 腹腔内投与における Cisplatin Carboplatin, 254-S の薬理動態学的検討

国立福山病院

赤松可得, 中妻嘉夫, 岡田悦子, 平林光司

〔目的〕 Cisplatin, Carboplatin, 254-S について、腹腔内投与における薬理動態学的差異を求め、臨床への feed back を試みる。

〔方法〕 1. これらの薬剤を卵巣癌例について、腹腔内投与し、その pharmacokinetic parameter を求めた。2. Cisplatin, 254-S については IV, IP 投与における血清中の ultrafiltrable pt の値を chemical assay と biological assay とで比較検討した。3. 3H-5Fu を吉田肉腫腹腔内移植ラットに IP 投与し腫瘍表面からの penetration depth を microradioautograph にて求めた。

〔成績〕 1. Carboplatin, 254-S では、Ip, Iv 投与時の ultrafiltrable pt のパターンは類似しているが Cisplatin とは異なっている。2. Cisplatin における Ip 投与時の血清中 ultrafiltrable pt 濃度は、chemical assay と biological assay とで異なり、後者でより低値が得られた。一方、254-S の場合はその dissociation は認められなかった。3. 3H-5Fu 実験では、最大の penetration depth は 2.5 mm であった。

〔結論〕 1. Carboplatin, 254-S については血清中の ultrafiltrable pt と Total pt とはほぼ同様なパターンを示す。2. Cisplatin の場合、Ip 投与され血中に移行した ultrafiltrable pt の biological assay 値がより低い事からその pathway において、何等かの degradation の存在が示唆された。一方 254-S では認められなかった。3. 3H-5Fu 実験の成績は Ip 投与法の限界を示唆しており、今後、その効果をたかめる為には温熱、AT-II などとの併用が必要と考えられた。